

アルゼンチン -- 名門チームと二部降格 (特集 途上国・新興国のスポーツ)

著者	菊池 啓一
権利	Copyrights 日本貿易振興機構 (ジェトロ) アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	237
ページ	36-37
発行年	2015-06
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://doi.org/10.20561/00039811

アルゼンチン

名門チームと二部降格

菊池 啓一

アルゼンチンのスポーツといえ
ばサッカーである。もちろん、
サッカーが嫌いなアルゼンチン人
も（特に上流階級には）決して少
なくはなく、北米NBAのサンア
ントニオ・スパーズに所属するエ
マヌエル・ジノビリを輩出したバ
スケットボールや、ガブリエラ・
サバティーニが活躍したテニスの
人気も高い。また、一九五三年に
ファン・ドミンゴ・ペロンによつ
て発せられた大統領令により、ア
ルゼンチンの国技は馬に乗りなが
ら専用のボールを奪い合う「パ
ト」であると定められている。し
かし、試合翌日でなくともスポー
ツ紙面の八割近いページが割り当
てられていることから明らかに
あるように、アルゼンチンのス
ポーツ界はサッカーによってほぼ
独占されている。そこで、本稿で
はアルゼンチンの国内リーグの名
門チームと、そのうちの一つであ

るリーベル・プレート（以下、
リーベル）の二部降格およびその
余波について簡単に述べてみたい。
なお、南米のサッカーをご存知の
方には物足りない内容であろう点
を予めお断りしておく。

●アルゼンチンの名門チーム

筆者の大まかな印象では、ブエ
ノスアイレスの街角における近所
のおじさんたちの会話のテーマの
ほとんどは、目の前を通り過ぎた
女性の容姿に関するものか、サッ
カーの国内リーグにまつわるもの
である。昨年ブラジルで開催され
たFIFAワールドカップの決勝
戦に先発出場した一人は全員国
外のチームに所属していたが、そ
の多くはアルゼンチンの国内リー
グでの活躍を認められてヨーロッパ
各国のチームへの移籍を勝ち
取った選手たちである。このよう
な傾向もあって、全体的にアルゼ

ンチンにおける国内リーグへの関
心は極めて高く、国外在住のアル
ゼンチン人たちも自国のリーグ戦
の結果を常に気にしている。

それでは、国内リーグではどの
チームの人氣が高いのであろうか。
表は、全国紙『クラリン』の傘下
にあるテレビ局「ブエノススポーツ」
がウェブサイトで二〇一五年一
月から三月にかけて行った調査の
結果を示したものである。アルゼ
ンチン人がその生涯において自ら
の応援するチームを変更すること
は極めて稀であるため「アンケー
ト」ではなく「インチャ（サポー
ター）国勢調査」と名付けられた
同調査にはおよそ二五万人が参加
し、日本のサッカーファンにも馴
染み深いボカ・ジュニオルス（以
下、ボカ）が一位、リーベルが二
位となった。ロサリオ・セントラ
ルとニューウェルス・オールド・
ボーイズが三位と四位に入ったの

はやや意外であるが、その後が続
くインデペンディエンテ、ラシ
ン・クルブ、サン・ロレンソは、
前記のボカとリーベルと共に、そ
の歴史的伝統やソシオ（クラブ会
員）の多さから「名門」であると
されているチームである。名門
チームのサポーターの要求が厳し
いことは万国共通であると思われ
るが、なかでもリーグ最多の三六
回の優勝を誇るリーベルのイン
チャの関心は、「スーペルクラシ
コ」と呼ばれる対ボカ戦に勝利し
てボカのインチャを馬鹿にする
「権利」を得ることと自チームが
一部リーグ（プリメーラ・ディビ
シオン）で優勝することであり、
彼らにとって二部リーグ（プリ
メーラ・B・ナシオナル）とはリ
アリティの無いおとぎ話の世界で
あった。

●リーベルの二部降格とその余波

そんなリーベルがクラブ史上初
の二部降格を経験したのは、二〇
一〇―一一シーズンのことであつ
た。ただし、このシーズンの同
チームの成績は前期が二〇チーム
中四位、後期が九位である。決し
て悪くはない成績であるが、それ

表 アルゼンチンの人気上位10チームと2014シーズン(半期)の平均観客動員数

チーム名 (本拠地)	インチャ数(%)	平均観客動員数
ボカ・ジュニオルス (ブエノスアイレス)	22.5	41,000
リーベル・プレート (ブエノスアイレス)	16.1	54,000
ロサリオ・セントラル (ロサリオ)	9.9	36,750
ニューウェルズ・オールド・ボーイズ (ロサリオ)	7.7	39,000
インデペンディエンテ (アベジャネーダ)	7.5	31,833
ラシン・クルブ (アベジャネーダ)	5.5	30,750
サン・ロレンソ (ブエノスアイレス)	4.7	19,750
タジェーレス (コルドバ)	3.8	
コロソ (サンタフェ)	2.7	
エストゥディアンテス (ラプラタ)	2.4	23,400

(注) タジェーレスとコロソは下部リーグに所属していたため、「平均観客動員数」が空欄。
 (出所) TyCスポーツが2015年1月から3月にかけて行った「インチャ国勢調査」とlivefutbol.comのデータを基に筆者作成 (http://www.tycsports.com; http://www.livefutbol.com)。

でも降格してしまったのは過去三年間の一試合当たりの平均勝ち点(プロメディオ)を基に降格チームが決定されるためである。この「プロメディオ」制は有力チームが一シーズンの不調で二部に降格してしまうことを防ぐ目的で考案されたものだといわれており、南米でもアルゼンチンだけでなくボリビア、コロンビア、パラグアイの国内リーグで採用されている(ウルグアイの国内リーグも類似の制度を採用している)。しかし

その一方で、昇格一年目のチームには極めて不利であり(リーグの上位に食い込まなければ一年で降格してしまう)、また、好調なチームが数年前の不調が原因で降格の憂き目にあってしまうこともある。リーベルも二〇〇八―〇九シーズン前期に最下位で終わったツケを挽回することができず、二〇一〇―一一シーズン終了時点でプロメディオが二〇チーム中一七位になってしまった。そして、二部リーグ四位のベルグラノとのホーム&アウェー方式の入れ替わりの戦いに出場することになり、アウェーの第一戦が〇対二、ホームの第二戦が二対一(インチャの暴動により後半途中で打ち切り)という惨憺たる結果で二部に降格してしまったのである。

この結果に慌てたのが当時のアルゼンチンサッカー協会会長のフリオ・グロンドーナであった。前掲の表に示されているように、リーベルは一試合あたりの観客動員がアルゼンチンで最も多いチームであり、同チームの二部降格によるリーグ全体の経済的損失は非常に大きい。さらに、もしリーベルが一部への昇格に失敗してしまうと、その損失は拡大する一方で

ある。そこで、彼は一部リーグと二部リーグを統合した四〇チームによるリーグを新たに創設し、リーベルの降格を阻止しようとした。しかし、一九七九年から死去する二〇一四年まで三五年間会長職の座にあり続け、「独裁者」とも評された彼をもつてしてもこのような強引な改革を押し進めることは難しく、リーベルは二〇一一―一二シーズンを二部リーグで戦うこととなった。

幸いグロンドーナの心配は杞憂に終わり、アルゼンチン代表のフェルナンド・カベナギと元フランス代表のダヴィド・トレセゲ(彼の両親はアルゼンチン人で、二重国籍を有している)を獲得するというなりふり構わぬ補強を行ったリーベルは二位のキルメスを勝ち点一差で振り切つて二部リーグ優勝を果たし、一年で一部リーグに復帰した。しかし、二〇一二―一三シーズンにグロンドーナ自身がかつて会長を務めていたインデペンディエンテが降格するとリーグ改革の動きを再燃させ、死去する二カ月前の二〇一四年五月に一部リーグを三〇チームに拡大する案をまとめた。その結果、二〇一五年から一部リーグは三〇

チームによる総当たり戦となり、二部への降格も「プロメディオ」での下位二チームのみという制度に変更された。すなわち、名門チームの降格がきっかけとなり、彼らが二度と二部に降格することはないようリーグのルールが大幅に変更されたのである。

以上のようなルール変更の他にも、ボカのインチャによってリーベルの「B」(二部)への降格を揶揄する「Riebe」(本来の綴りはRibe)なる造語が生み出されたり、入れ替え戦をテレビで観戦中にありつたけの罵詈雑言を画面に浴びせかける様子を家族によってYoutubeにアップロードされてしまったリーベルのインチャのタノ・パスマン氏が一躍時の人になったりするなど、リーベルの二部降格は一種の社会現象と化した。日本でも二〇一二年のガンバ大阪のJ2降格が驚きをもって捉えられたが、サッカー大国アルゼンチンにおける名門チームの二部降格の余波の大きさは計り知れないものなのである。

(きくち ひろかず/アジア経済研究所 ラテンアメリカ研究グループ)